



家康公が夢見た貿易

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねたか



洋時計(久能山東照宮所蔵 重要文化財)

スペイン国王のお抱え時計師ハンス・デ・エバロが1581年に製作し、マニラ前総督ドン・ロドリゴ一行の海難救助の謝礼として、1611年にスペイン国王フェリペ三世から家康公に贈られたもの。2012年に大英博物館のデービッド・トンブソン氏が調査し、「この時計には16世紀のオリジナル部品が99%残っており、伝統的なフランドル時計の珍しい生き残りであり、日本の機械装置に影響を与えた起源となる重要な遺産」との評価を得た。



東洋の香料を求めて旅立ったポルトガル人が種子島に漂流して、鉄砲が伝来したのは一五四三年で、家康公はまだ一歳でした。

戦国の武将たちは、すぐにこの近代兵器に着目し、世界最高水準にあった刀剣鍛冶の技術を転用して、驚くほどの速さで高性能の鉄砲の生産に入りました。そしてこのことが戦国時代の性格を一変させます。戦死傷者の数が激増し、勝負の決着が早く、決定的になったのです。

フランシスコ・サビエルが布教のために日本に来たのは、鉄砲伝来の六年後で、この頃から日本は南蛮ブームの時代に入ります。日本が初めて西欧諸国の実態を認識した画期的な時代でした。家康公も、世界地図を眺めて、日本の位置と、あまり大きくない島国である実態

をはつきりと認識したわけです。

スペインは一五三五年にルソン島のマニラに本拠地を構えます。キリスト教を禁止した秀吉公が一五九八年に亡くなると、家康公は、宣教師ジエロニモを召還し、フィリピンとメキシコ間の交易に日本が参加することの仲介を要請しました。また、その太平洋航路の日本への寄港を要請し、日本各港の安全な提供を約束しています。ただし、キリスト教の宣教は禁止の条件付きでした。

関ヶ原の合戦の年には、難破したオランダ船の水先案内人ウイリアム・アダムズを召し出し、西洋式外航船の建造を命じています。翌年には、正規の貿易ルートを確認するために朱印船の制度を作り、フィリピンの総督、安南国など東アジア諸国に通告します。

一六〇九年、上総岩和田にスペイン

ン船が座礁し、メキシコ経由で帰国途上だった前マニラ総督ドン・ロドリゴら乗客・乗組員が救助されました。家康公は彼らを手厚く扱い、彼らが帰国するための船舶を贈与すると同時に、太平洋貿易への参加をスペイン国王フェリペ三世へ要請する書を託します。

フェリペ三世からは丁重な感謝の念とともに、精巧な置き時計が送られてきましたが、日本がキリスト教を受け入れることを更にするのみで、太平洋航路進出の夢は実現しませんでした。その後も家康公はアジアへの朱印船貿易の拡大に努められました。西歐交易船との摩擦も多く発生し、幕府は鎖国への道を選びます。家康公の枕元で、美しい音で時を告げた時計も御遺品として長く眠りについたこととなります。